

國學院大學学術情報リポジトリ

談話室 「秀次事件」騒動、その後

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢部, 健太郎, Yabe, Kentaro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000104

「秀次事件」騒動、その後

矢部健太郎

二〇一三年十一月十八日(月)、産経新聞の朝刊に「豊臣秀次切腹に新説：秀吉は命じず、身の潔白訴え自ら切腹か 国学院大准教授が「太閤記」に疑義」という記事が掲載された。記者の渡部裕明氏とは、同年十月に行われたシンポジウム「聚楽第の再検討」で初めてお会いした。私にとつて、京都での学会発表はこの時が初めてで、五名の報告者の末席に加わり「秀吉の政権構想と聚楽第」と題して報告をしたのである。それは、当時話題であった聚楽第の石垣発掘と保存を意識したシンポジウムだったから、当然聚楽第破壊の経緯にも触れなければならない。そうすると「秀次事件」は避けて通れない。ちょうど翌月に刊行される予定だった拙稿「関白秀次の切腹と豊臣政権の動揺―秀吉に秀次を切腹させる意思はなかった―」(『國學院雜誌』一一四―一一)の内容について、少しばかり紹介したのであった。

すると、私見に関心を持たれた渡部氏から終了後に声をかけられ、ぜひ記事にしたいので雑誌刊行の暁にはよろしく、との話をいただいた。それが、先の新聞記事掲載のおおまかな背景である。関東版では社会面の小さい記事だったが、関西版では、秀吉のお膝元ということもあってか一面に大きく掲載され、一時はインターネット「Yahoo ニュース」のトップ記事になるという、私としてもまったく予想外の展開をみたのである。

さらに驚いたのは、インターネットの掲示板サイトに、この問題に関するスレッドがすぐさま立てられたことであった。そのコメント数はわずか一晩で一〇〇〇を超え、「パート2」が動き始め、それもまた一〇〇〇を簡単に超えていった。四百年以上も昔のことに関心をもっている方々がこれほどいるのかと、ありがたくもあり、畏ろしくもあった。

気になってたまにのぞき見していたが、ほとんどは「ありえない」「何言ってる」といった批判や否定的な見解で占められていた。そのことに私は、怒りを覚えるどころか、逆に秘かに安堵したものである。研究者として最も恐れるべきは、「あたりまえ」「何をいまさら」と言われることだからだ。否定的な見解についても、新聞記事を見ただけで論文に目を通した様子はなく、真に私見を否定するに足る根拠や筆者の知らない史料、より正確な史料の読み方などは、ネット上の反応からは一つもみつからない。学界からの反論も予想されるけれども、私見を修正する必要性を現時点では感じていない。

『國學院雜誌』という学内雑誌への投稿だから、厳格なレフェリーを経ない不十分な論考だ、との指摘もみられた。ただ、私は特集号の全体方針との整合性を十分に考え、当時最も完成度の高い論文を提出したつもりだから、安易な形式上の批判も妥当ではない。

大学教員の本分は、最先端の研究活動、質の高い教育、大学運営に関わる学務、という三本柱から成るといえる。その全てが重要で、本来そこに優先順位はないのかも知れないが、強いていえば研究こそが最も重要だと私は認識する。最先端の研究なくして質の高い教育はなく、学務だけでは対外的なアピール度は不十分だからだ。やはり大学教員は、その所属する機関を代表して研究活動を行うという自覚を持たねばならない。先の論文を『國學院雜誌』に投稿したのも、そうした覚悟、そして自分なりの流儀に基づいている。

歴史を語るだけなら本を読むだけでもできる。しかし、新たな学説を唱えようとすれば史料の博搜と緻密な読解が不可欠であり、「秀次事件」の全容解明もお道半ばである。幸い、拙論が新聞・ネットに取り上げられたその日に某出版社から電話があり、翌日会々と早速「秀次事件」をメインテーマとする単著の執筆を依頼された。こちらの都合でじっくり腰を据えて書かせていただきたい、とお願したが、そう遠くない未来に刊行される時が来るはずである。

「騒動」は、まだ終わりそうにない。むしろ、これから本番である。